

# いしづち

2017.3

No.115



公益社団法人 愛媛県建築士会  
<http://www.ehime-shikai.com>



故きをたずねて 常信寺の靈廟建築  
光のはなし 和紙の光特性  
雑想 時間のお布施

<b>1</b>	故きをたずねて 第11回 常信寺の靈廟建築（松山市） 文化財・まちづくり委員会委員長	花岡 直樹 .....①
<b>2</b>	光のはなし 和紙の光特性～和紙の反射と透過～	宮地電機株 田部 泉 .....②
<b>3</b>	竹のはなし 「エピソード編」(2)	山田竹材 山田 清昭 .....③
<b>4</b>	基礎のこと 愛媛基礎工事業協同組合の活動2	愛媛基礎工事業協同組合 田中 清久 .....④
<b>5</b>	自然と家とにんげんと 消え去る職人	今治支部 橋詰 飛香 .....⑤
<b>6</b>	くさぐさの風景 冬の花～山茶花～水仙～福寿草	松山支部 安藤 雅人 .....⑥
<b>7</b>	雑想 時間のお布施	松山支部 玉乃井公和 .....⑦
<b>8</b>	被災建築物（鳥取地震）報告	大洲支部 毛利 政友 .....⑩
<b>9</b>	ヘリテージマネージャー養成講座報告 第8回講座（12月17日） 講師 八女町屋再生応援団 代表	北島 力 .....⑪
<b>10</b>	支部報告 第8回いまばりのまちをつくろう絵画コンクール 今治支部 絵画コンクール 「今治のまんなかにこんな建物あったらいいな！」 担当副支部長 「逆打ち体験！お遍路ウォーキング」のご報告 松山支部	曾我部 準 .....⑫ 高須賀範昌 .....⑬
<b>11</b>	委員会報告 女性委員会主催 瓦の勉強会に参加して 女性委員会 新年会の開催報告 青年委員会 とびだせ建築士in南予 青年委員会 平成28年度技術講演会「日本建築の美しさ」報告 広報委員会 「いしづち縁会」の開催報告について	松山支部 川崎 陽子 .....⑭ 松山支部 佐々木幸子 .....⑭ 大洲支部 毛利 政友 .....⑮ 青年委員長 松平 定真 .....⑯ 広報委員 渡邊 道彦 .....⑰
<b>12</b>	けんちくの輪 走ってみた トランプと安倍とLa Manchaの男	新居浜支部 鴻上 八大 .....⑯ 宇和島支部 山本 義文 .....⑯
<b>13</b>	お知らせ 平成29年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について 編集後記	.....⑯ .....⑯

※ 尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



## 版画

題：「弓削神社の屋根付橋」  
山田 きよ

[表紙の版画について]  
内子町石畠地区にある弓削神社は、境内全域が景勝地であり、春には梅や桜、秋には紅葉と四季折々に色々な姿を見せててくれる。池に架けられた屋根付きの太鼓橋は社殿への参道となっており、その幽遠で麗美な風景は、訪れる人の心を奪う内子名所の一つである。  
この作品は、そうした風景を切り絵調に単色で仕上げた版画となっている。

表紙作者 山田 きよ プロフィール

1959 壱多郡五十崎町（現内子町）に生まれる  
1980 松山デザイン専門学校卒業  
1982 広告デザイン会社を退社し、家業の竹材業に就く  
1988 独学で切りぬき手法のシルクスクリーン版画を初制作  
以後、内子町内子座や大仏合戦のポスターを手がける  
1993 初の個展  
2003 愛媛県文化協会奨励賞  
2012 個展回数が100回となる  
(本名 山田 清昭 内子町在住)

# 「故きをたずねて」

## 第11回 常信寺の靈廟建築(松山市)

文化財・まちづくり委員会 委員長 花岡 直樹

祝谷山常信寺（天台宗）は、松山藩久松松平家の菩提寺のひとつで、松山城の鬼門を守護するお寺です。松平初代藩主の定行は寛文8年（1668）に亡くなりますが、遺言通り常信寺に葬られ靈廟が建築されました。3年後の寛文11年までには完成されたと見られています。「靈廟」とはあまり聞き慣れない言葉かもしれません、桃山・江戸期に建てられた亡き武将などの偉人や貴人を祀る宗教施設のこと、徳川家康の日光東照宮は有名です。



松平定行の靈廟 手前の拝殿と奥の本殿

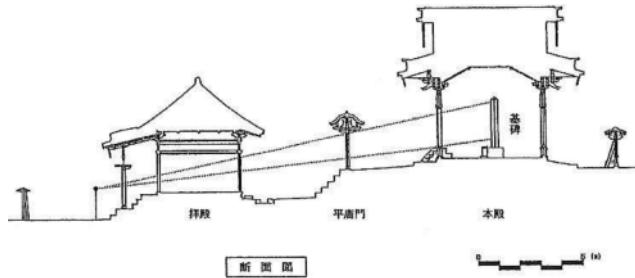
写真の左奥の建物が本殿で、中には定行の墓碑が中央にぽつんと立っているだけです。その正面には中門（平唐門）が建ち、中門の両脇より本殿四周を透塀が囲んでいます。右手前の建物がその拝殿、いわゆる子孫が礼拝を捧げるための建物です。靈廟建築はたくさん残されていますが、このように拝殿を持つものは数少なく珍しいものです。

これらの建物が建っている地盤面は、拝殿の向拝前、拝殿、本殿と階段状に上がって行きます。これは、地形に順応して建物を建てたのはもちろんですが、どうやらそれだけではないようです。拝殿前面の桟唐戸と背面の格子戸、中門の扉、さらには本殿入口を全て開放し、拝殿の前に立って見上げると、限られた空間を一直線に通って、本殿内の定行の墓碑が目に飛び込んできます。これは拝殿の床に座ったときにも、ほぼ同じ見え方になります。拝殿内部は板張りとなっていますが、ここで法要を営むときには畳を敷いて座るそうです。因みに直前

の法要は昭和43年の定行の300年祭と伝えられています。なんともにくい演出ですね。



拝殿の格子戸を開けると見える本殿内の墓碑



靈廟断面図

また、この定行の靈廟の東には、弟定政の靈廟がひっそりと建てられています。これらはすべて県の文化財に指定されていますが、建造物としてではなく、敷地も含めて記念物（史跡）としての指定となっています。桜の季節には本殿の周りはピンクの絵の具で塗りつぶされたように桜で覆われます。お花見がてら出かけられて、昔を偲んでみてはいかがでしょうか。



桜の頃の靈廟全景

# 光のはなし 和紙の光特性 ~和紙の反射と透過~

宮地電機株式会社 照明・LED 担当室 田部 泉

日本の建築で使用されている障子は、本来は和紙でしたが、最近ではプラスチックの両面に和紙をラミネートした強化和紙が多く用いられています。それは、本来の和紙の持っている魅力が失われている気がする。和紙は光・音・熱・空気に対して透過・反射によってフィルターのような役割をしている。

そこで、障子の役割のひとつである光に注目してみる。住空間では障子を通じて昼と夜の両側面に光効果がある。昼間では自然光の遮断と採光、そして夜間では人工光の和紙の持っている素材の反射や透過による光効果を見ることができる。障子は、直射光線を遮るが、その約半分（どのくらいか実験する）くらいの光線を透過して拡散光として柔らかな光で室内を明るくする。照明効果においても和紙の透過と反射の効果がどのような効果があるのか実験してみる。実験方法は図1のような実験をする。実験光源は白熱電球60W、電球形蛍光灯15W電球色、LED電球10W(P社)、LED電球10W(P社)の4種類の光源と和紙①(楮紙薄型口イ草入り和紙)、和紙②(雲竜紙)、和紙③(雲肌紙)の3種類の土佐和紙を用いて、各光源と各和紙でどのように照度、色温度、波長、演色性など透過と反射の光効果があるのかを調査した。図2は1例として白熱電球の実験測定の分光分布図を示す。その透過実験の過程を図3の写真で見え方を写真で示す。

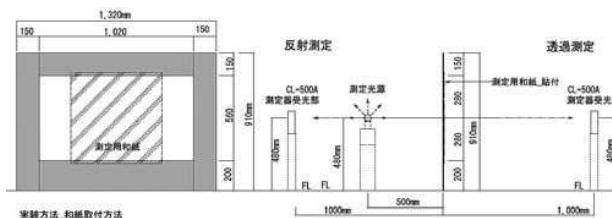


図1 実験方法



図2 実験写真 白熱電球60wと和紙1、和紙2、和紙3

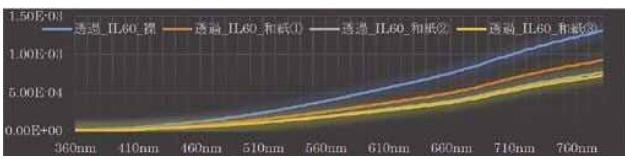


図3 白熱電球60Wと各和紙123の透過による分光分布

実験結果から、和紙の透過を見ると水平面照度は、光源の持っているピーク波長が短いほど透過率が良くなり、和紙の透過率は各和紙の平均値は45%～65%

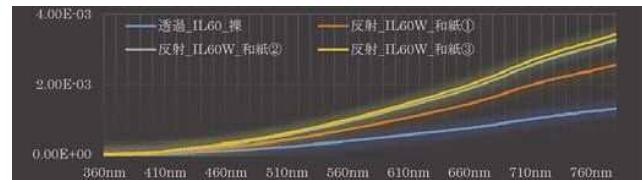


図4 白熱電球60Wと各和紙123の反射による分光分布



です。透過による光の演色性や色温度に変化があるかと実験数値を見てみると、さほど和紙の種類によっての効果が見られなかった。

目視では光効果が図2のような様子を写真確認できた。また、反射実験でもピーク波長の短い光源ほど反射率が良くなる効果があった。目視してもわかりますが、光効果は和紙の表面彩度に非常に左右される。和紙の持っている透過率を見る限り和紙②の透過率約50%、比較反射率約320%の和紙が日常の和紙として使いやすいのではと推測しました。

和紙の持っている特長で各素材の透過特性を図6で示す通り和紙には透過光の拡散効果がある。この拡散光の均一で柔らかなひかりが室内の落ち着きを醸し出している。

## 和紙の透過特性

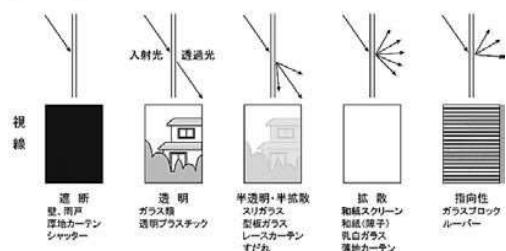


図6 和紙の通過特性 (参照: 障子の本 p57)

白熱電球、蛍光灯、LED電球の各2種類の計4種類の光源でも光の見え方なども違い、活用方法に合った和紙を見定める必要がある。

日本の住宅などの建築空間において、世界に誇れる和紙の使用目的や使用方法などにより、透過率と反射率を考えた和紙活用を推奨したい。

## 「エピソード編」(2)

山田竹材 山田 清昭

竹伐りさんの話をしよう。

伐採した竹を一年中納めてくれる「竹伐りさん」と呼ばれる人は、わが社の全盛期には20人以上いた。

土場（竹材搬出場）で積み込み作業を終えると、いつもその場で代金を現金で支払っていた。皆ではないが、ギャンブラーの人がいて、パチンコ、競輪、競艇といった賭けごとにそれら稼いだお金を投じていた。そういう人たちには、その資金が尽きる頃にまた竹伐りを始めるという調子だった。

たまにある人はヒヨッコリ現れて「山田さん、すまんがお金を貸してくれまいか?…」とやって来る。話を訊くと、持ち金すべてをパチンコでスッてしまったというので、取りあえずガソリン代という名目でいくらか貸してやる。中には、取り引き翌日に一日で全額スッてしまつたといって泣きついで来るオジさんもいた。そんな人たちを私は小さい頃から見ているので、ギャンブルは一切やらない。私の子どもたちにも口を酸っぱくいい訊かせたくらいだ。

そういう竹伐りさんの中には根性の悪い奴もいて、竹材が出揃ってもないのに先に代金を要求してくるのだ。とにかく繁忙期は竹材が間に合わないので、前貸しも仕方がなかった。そうするとどうなるか?…。そういう奴らは、竹が出揃うと我が社に竹材を引き渡さず、他の業者に売り付けるのだ。借金を天引きされない他業者から丸々代金を頂く、つまり踏み倒しである。そんな事実が発覚したときは既に遅く、そいつは行方知れずの三度笠…。

面白い竹伐りさんもいた。良好な竹材を求めて竹林を案内してもらってたときだった。山道を先導してもらい歩いていると突然「山田はん、気を付けなはいよ!」と言うので、私は道端に毒ヘビかスズメバチの巣でもあるのかと用心し身構えると「そこの家には後家はんがおる!」と言ってきた。

「ハア?? 気を付けるのは、あんたのいやらしい脳ミソ



昭和42年（1967年）5月 山田竹材 男性従業員

じゃがり 終生おちゃ目なオヤジだったが、晩年はアル中がひどかった。

悲しい出来事もあった。仕事が几帳面で手際のいい竹伐り Aさん、20年くらい前のことである。いつものように竹林で一緒に積み込み作業をしているときだった。「山田はん、ちょっと待ってや…」と私に声を掛け、抱えていた竹の束が力なく手元から離れ足元に落ちると、Aさんはヘナヘナと地面に倒れ込んでしまった。

「Aさん! どうした?!」抱き起こし何度も彼の名を呼んだが反応がない。眠ったように目を閉じたままである。急いで救急車を手配し Aさんを病院へと搬送してもらったが、このときほど時間が長く感じ途方に暮れたことはなかった。

Aさんは、脳梗塞と診断され、結局その二週間後に帰らぬ人となった。哀れな姿で山から連れ帰り、意識が戻らぬまま亡くなつて行く仕事仲間を目の当たりにして、遺族には申し訳ない気持ちで一杯だったが、「父は、仕事場（竹林）で最後まで山田さんと仕事が出来て幸せだったと思います。」と掛けてもらった、Aさんの息子さんの言葉になにか救われたような気持ちになり、山で生きてきた Aさんの生き様がとてつもなく素晴らしいと思えたのだった。

# 愛媛基礎工事業協同組合の活動 2

基礎のこと

4

愛媛基礎工事業協同組合 田中 清久

今回は愛媛基礎工事業協同組合の「人材の確保と育成」に向けた取り組みを紹介させて頂きたいと思います。

人材不足が深刻な問題になってきたこの数年で、各団体や企業が行う出張講座や体験学習会は益々盛んになってきています。

これは直ぐに効果が期待できるものではありませんが、確実にその業種の仕事を子供たちに体験させることができ、将来の就職先の選択肢と十分なり得ることができます。

私達組合も発足当初より出張講座の開催を計画しており、昨年は松山工業高校の建築科一年生と土木科三年生を対象に基礎工事の出張講座を行いました。

その内容は、最初の1時間で座学を行い、地盤と基礎について種類や工法、その役割と重要性を説明し、その後5時間の実習で簡易な基礎の模型を実際に作成いたしました。

コンパネや桟木を加工して型枠を作成し、鉄筋を切断し曲げ加工を行い実際に組み立てていきます。そして最後に生コン車が到着し、受入検査をしたのち組みあがった模型に生コンクリートを打設します。

土工・鉄筋・型枠・コンクリート打設といった全てを施工する基礎工事業者だからこそ可能な講座内容で、生徒や先生からも高い評価を頂くことができました。

何よりも嬉しかったのは、生徒の真剣で楽しそうな表情を目の当たりにし、「建設業の将来も捨てたものではない」と参加した組合員全員が実感することができたことです。

大切なのは、業界に対する興味や関心を持つてもらうこと、そして「ものづくり」の楽しさや達成感といった「喜び」や「やり甲斐」をどのように体験させるかだと思いました。

この出張講座はこれからも毎年継続して行う予定です。前述したとおりすぐに入職者が期待できるものではありませんが、3年後・5年後に必ず芽が出て花が咲き始めることができると確信しております。

人材の確保に向けた取り組みと同時に大切なのは、育成に向けた取り組みです。

せっかく業界に眼を向けてもらっても、将来に不安を抱いてしまうような雇用内容では就職先の選択肢とはなりません。他の産業と同等の賃金と社会保障、そして人材を育成する仕組みを確立していく必要があると思います。

賃金と社会保障については次回掲載予定の「適正な工事価格」のテーマの中で書かせていただきますので、今回は人材の育成について少し触れたいと思います。

建設業界では「3年以内離職率」という言葉をよく耳にします。これは「入社後の働きやすさ」や「ミスマッチ」が原因とも言われていますが、私は、段階に応じた人材育成の仕組みが無い事が最も大きな要因だと考えています。

他の産業のような新人や中堅に行う研修が少なく、能力に応じた役職や賃金の設定が成されていないこの業界では、自己の成長を実感する機会が少なく、また目標の設定が遠すぎたりで、結果として将来に不安を感じたり、やり甲斐を無くしてしまったりするのではないかでしょうか。

この事に重きを置き、いま建設業界において最も人材育成に注力している団体は、私の知る限りでは全鉄筋（全国鉄筋工事業協会）です。

「職業生涯モデル」という自己の将来像が想像しやすいモデルプランがあり、また「TETSU-1 グランプリ」という全国鉄筋技能大会の開催によって、技能を研鑽する目標を持てる機会があります。

こういった素晴らしい取り組みを見習い、私達愛媛基礎工事業協同組合も雇入時の教育からはじまり、技能レベルに応じた資格の取得、役職および権限の付与など、入社してからすぐに目標設定ができ、そして自己の成長を実感できるとともに更なる高みを目指せるような仕組みを、これから一つ一つ創り上げていきたいと思います。

最後までお読みいただき有難うございました。

# 消え去る職人

今治支部 橋詰 飛香

建築業界は今後訪れるであろう職人不足に危惧していると言われています。私の手掛ける昔ながらの家づくりでも、常に付き纏う重要課題が職人の存続です。それは現代工法よりもなお一層の厳しさを感じているところ。伝統構法は高い技術力や経験が何より求められる現場でもあり一、二年では会得できない仕事ばかり。そういう伝統技法での現場が極めて少ないため経験の機会すらないのが現状と言える。

この家づくりを始めた当初、職人探しから始めた。職人がおらず「いない、いない」と嘆いてばかりいた事を思い出す。しかし「いない」のではなく「生きる環境がない」のだと根本的な事に気がついた。伝統構法での家づくりは、あらゆる職人達が有機的に結びついて形成された生物群のようなもの。彼らの生息域が無いのならまずは私自身の仕事がビオトープに成らなければと思ったのだ。そう考えると設計という仕事に今までに感じた事がない様なワクワク感を覚えた。何故なら昔ながらの家づくりの良さを伝え、きっかけとなる最初の一歩を踏み出せるのは誰よりも施主に近い設計者の仕事だからだ。それは初めて設計と言う仕事の奥を知った時だったと思う。そうやって一軒一軒の現場が若い職人さん達の技術習得の機会になってくれればと願って今やっている。

しかし見渡せば時給いくらで経験はなくともその日から収入になる様な仕事が現代は溢れている。建築現場で暑い最中に汗や埃にまみれ身体を酷使しなくとも効率の良い仕事がいくらでもある時代。大工であれば手間請けで、道具一つであちこちの現場をスピードにこなしながら渡り歩くほうがずっと利益になりやすいし、昔の様に自分で刻屋や加工機を構え請負するよりも、手間請けで大工をやっていく方が負担もなく楽であるが為。殆どの若い大工さん達はそうやって仕事量の多いメーカー住宅の下請けとなっていく。しかし技術を必要としない現場で大工技術など育つ訳がなく・・大工さんの多くは鑿や鉋を使うことは殆どないと言う。「鑿を使うのはボンドを削ぎ落とす時だけ」その言葉を聞いたとき寂しい気持ちがした。そこにやり甲斐はあるだろうかと・・。

そんな一見安定してそうな手間請けも、若く身体が動くうちは重宝がられるが、身体が動かなく効率が悪くなれば、より手の早い若い大工に取って替わられる。効率重視の現場では、効率の悪い職人は常に切り捨てられていくといった事が表裏一体で行われる。誰もが出来る仕事は、誰かにいざれ取って替わられる。職人不足と言いながらそういった職人を駒のように使い捨てにする風潮

があるのが建築業界だと感じる。

時間が掛かって得た技術や経験・智恵は、そう簡単には替わりがないもの。伝統技術の良さは年がいて仕事の効率が落ちても、培ってきた智恵や経験が評価されるところだろう。しかし今のサラリー的考え方の下では親方が弟子を育てる事が至極困難となって伝統技術を繋ぐ大きな壁の一つとなっていると言える。昔は丁稚奉公で、仕事が出来るようになる為に親方から仕事を習うのであって、仕事も出来ないので給与を貰う人はいなかった。弟子は働く事でこれから一生を食べていく為の仕事や礼儀を学び、親方は弟子が入る事で金勘定できない雑用を彼らで処理し、良質な物づくりに専念できたのだ。そんな仕事を見て弟子も育った。両者にとってこれ以上のメリットがあるだろうかと感じるのだが、今こんな事を言うと懐古主義の非常識扱いされる・・。しかし伝統技術を繋ぐためにもまずは目先のお金に囚われるのでなく、しっかりと技能を身に付けようと言う心構えの子がいる。後身の育成は仕事に携わってくれている職人さん達が現在取り組んでいる課題。しかしその前に腕を磨きたいと目標にする様な家を設計しなくては。



(やり甲斐のある仕事を求め集まるこれからの時代を担う若手大工さん)

建築業界は今後、職人不足解決の為に人材育成もするが、人の手を必要としない製品や工法開発をも計っていく事になるだろう。そうなれば昔ながらの家づくりと言わず、オリジナリティを要求される設計士の家づくりさえも建築困難になる日がやって来る。どんなに優れた設計であろうが建物を造れる人がいないのであれば、本当に「絵に描いた餅」となる。

そう危機感を感じるのは私だけだろうか・・。

# 冬の花 山茶花～水仙～福寿草

くさぐさの風景

松山支部 安藤 雅人



サザンカ

春から始めたこの隔月の連載も6回目となり、春夏秋冬と季節が巡りました。今回は冬の花を取り上げます。

まず、山茶花が咲き始めると、冬の訪れを感じます。

山茶花と椿の区別の話は避けて通れません。山茶花は冬の花、椿は春

の花とされていますが、実は、椿は開花期が長くて、冬から春の花です。したがって、冬には山茶花と椿の両方の花が咲いていることになります。

一つ目の見分け方は、雄蕊です。雄蕊が、素麺の束のように円筒状になっているのが椿、揃わないで自然な形のが山茶花です。二つ目の良く知られた見分け方は、散り方です。椿は、花の形を保ったまま、ぽとりと落ちます。山茶花は、花びら各々がひらひらと舞い落ちます。人それぞれ好みですが、どちらも美しいです。



スイセン

黒澤明監督の映画「椿三十郎」の中の、数えきれない椿の花が水面を流れるシーンは幻想的で美しいです。以前に通勤経

路だった、松山市持田町辺りに、玄関へのアプローチに沿って、山茶花の長い植え込みがある家があり、夜に木枯らしが吹いた翌朝に通りかか

ると、赤い花びらの絨毯が玄関に向かって敷き詰められているようで、とても美しかったです。

1月～2月の寒さが厳しい時季には、水仙が美しいです。清らかで洗練された形や色がとても好きです。また、芳しい香りに癒されます。茶室に水仙が一輪活けられていたりするのも良いですね。

伊予市下灘の山の斜面の水仙畠の景色も良いです。鰯漁専用の黄色い船が泊まった青い海を背景にした真っ白な水仙畠が、とても絵になります。

最後にとりあげたいのは、福寿草です。この花は、最も早い時季の春の妖精（スプリング・エフェメラル）だとも言えます。

近場では、高知県大豊町の福寿草の里が有名です。私は、冬用タイヤを持っていないので、少し雪が少なくなつてから訪れました。満開で、勲章のように端正な形をした黄金色の花が数多く咲き誇り、とても美しいと思いました。しかし、地元の人に聞くと、既に見頃を過ぎていたみたいです。冷たくて真っ白な雪の中から、花だけが顔を出している状態が見頃であって、花の数が多くても、葉が生い茂っていては駄目だそうです。絵には、想像で雪を積もらせてみました。

次回は、是非、深い雪が積もっている中、最高の福寿草の花を観に行きたいです。誰か、四輪駆動で冬用タイヤを装着していて、花が好きな人がいらしたら、是非、福寿草が咲き誇る桃源郷に私を連れて行ってください。



フクジュソウ

# 時間のお布施

松山支部 玉乃井 公和

まことに唐突ですが、四十過ぎのある時、私は「時間」について考えたことがあります。

と言っても、数学や科学という言葉を聞いただけでも、常温で脳ミソが沸騰してしまいそうになる私のことですから、もちろん科学的な意味での時間ではなく、私の空想・或いは妄想の上の「時間」です。

以下は、その時の思い付きです。

あれはもう二十年以上も前の初夏の、緑萌える頃のことです。私は事務所のアルミの天板の応接テーブルに肘をつき、自らに疑問を発したのです。

「時間とは一体何なのだろうか？」、と。

傍らには、金色の振り子の置き時計があります。

私はじっと時計を見つめます。

しばらくして、自問自答が始まります。

金色の振り子が揺れている

これは時間か .... 時間ではない

時計の長針が動く

これは時間か .... 時間ではない

突然、すすめが目の前を横切る

これは .... 時間ではないのか？

木の葉が風に揺らいでいる

これは .... 時間ではないのか？

庭にうずくまる石

これも .... 時間ではないのか？

かたちとして 現わされたるもの

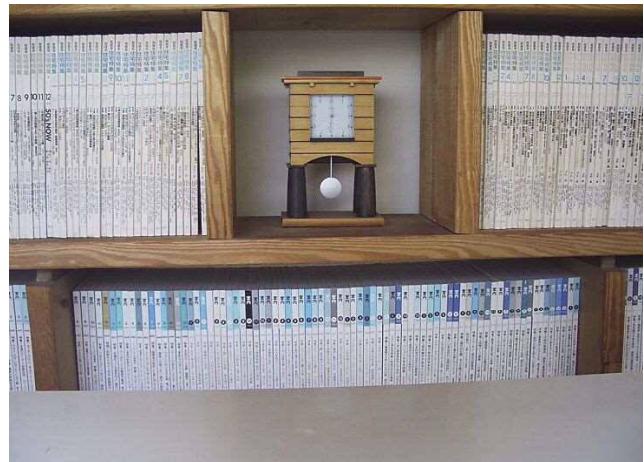
すべては 時間を表しているのではないか？

この「時間ではない」という答えの意味は、「時間そのものではない」ということであり、「時間ではないのか？」という答えの意味は、その「動き」によってそこに「時間があることを表している」のではないか、ということです。

つまり「時間」の本質とは、「動き」にあるのではないか、ということです。

それそれかたちあるものが、その中にどういった「時間」(動き)を持っていますか。「時間」そのものは私達の目

には見えませんが、「動き」という“最大公約数”を用いて、間接的にそれぞれに「時間」があることを、この時私は“見つけた”のでした。



即ち、振り子時計には、振り子にも長針にも規則的な「動き」があり、すすめには、羽ばたき・空を飛び・脈打つ心臓などの「動き」があり、木の葉には、風のゆらぎや、若葉・紅葉・落葉、或いは幹には年輪などの、ある規則的な「動き」や変化があります。

ではじっとして“動かない”石はどうでしょうか。

石にもじっと見つめてみれば、やはり「動き」が見えてきます。

石にも「さざれ石の巖となりて苔のむすまで」の「動き」や、逆に磐石の巖も風雨にさらされ、長い長い年月の果てに風化して砂粒となる「動き」があります。

このように見てみれば、この世界に形として存在するものは、すべてそれぞれの「時間」を持ち、その与えられた時間のスパンの中で「動き」、変化してそれぞれの表現をしているということが見えてきます。

そして、この「動き」や変化を数量として、その「形」の種類ごとに拾い出して合計し、それを「時間の表現量」として比較してみると、面白いことが見えてきます。

例えば、「石の表現量」を見てみれば、石は大きくなったり小さくなったりするか、または圧力による変化や磨かれて変化するくらいで、せいぜい“2 単位”か“3 単位”くらいの表現量です。

「木の表現量」はこれに比べると、根を伸ばす・養分、

水分を吸い上げる。大きくなる。花を咲かせる。実をつける。それから先程の若葉。紅葉。落葉。葉の揺らぎ。年輪を重ねるなど、石よりも多くの「表現量」があることが分かります。



これが動物になると、成長の変化はもとより、飛んだり、跳ねたり、食べたり、排泄したり、まばたきしたり、子孫を残したりと、もう数え切れないくらいの「表現量」があります。

人間はその上に、思惟し、自然の力を借りて、自然では成し得ない新しいものをつくり出します。

「人間の表現量」は、鉱物・植物・動物の持つ「基本的な表現量」に、人間が考え、つくり出すという「創造的な表現量」を加えると、その単位数は無数になります。

空想屋を重ねることになりますが、こうした「形」の種類ごとの「時間の表現量」を見てみれば、その「形」が地球上に現われた順に、それぞれの「表現量」が多くなっているのではないか、ということが“見て”きます。大雑把に言うと、鉱物—植物—動物—人間の順に。これは一体何を意味するのでしょうか。こうした疑問が出てくると、私の頭の中にはすぐに空想の入道雲が湧き上がります。

それは、こういうことではないかと思うのです。初めには鉱物・土があります。鉱物の「表現量」は少なく、その魂は、眠ったようにじっとして動きません。鉱物の次に現われる植物は、鉱物や土の中に根を下ろし、その中にある養分を吸い上げ、又、光や二酸化炭素を“原 料”として自らの生命を維持し、成長し、種を保存して

いきます。言い換えれば植物は、「鉱物などの表現量」をいただいて自らの「時間」を表現します。植物には土に縛られながらも少し「動き」があります。しかしその魂は、まだ目覚めたばかりのようです。

次の動物は、植物や小さな昆虫や、或いはその他の動物などを食べ、それにより生命を維持・成長・そして種の保存をしていきます。

動物は、鉱物・植物・昆虫・その他の動物などの、重層した「時間の表現量」をいただいて、自らの「時間」を表現します。

動物は、頂いたその「時間の表現量」の多さにじっとしておれず、その身体も魂も、文字通り動き回ります。



では、最後の人間はどうでしょうか。

人間は極端に言えば何でも食べます。生き物の中では一番雑食性があります。鉱物・植物・動物、ありとあらゆるものを見つけて、それを身体の中に取り込みます。

つまり人間は、他の多くの「形」からそこに重層された無数の「時間の表現量」をいただき、先の動物のように動き回るだけではとてもその「時間の表現量」を“消化”しきれず、その魂は思惟し、自然の力を借りながら、自然では成し得ないものを創り出します。

空想の結論はこうです。

この世の生きとし生けるものすべては、本来ならばまつとうすべき他のものの命、即ち「時間」を頂いて生きている。言い換えれば、「時間のお布施」の上に生き、生かされて在るということです。

中でも人間が一番、その恩恵に浴して生きている。つ

まり人間は、「時間の重層」の頂点に立って生かされている、ということです。

私達人間は、それほどまでに多くのものから「お布施」を頂き、しかも何か新たにものを創り出すときには、その材料としても、鉱物・植物・動物などの「時間」を頂いてつくっています。

ですから、例えば住まいをつくるにしても、いい加減な思いでつくり、表現していると、それこそ多くの“時間たち”的バチが当たるというものです。

さらには空想ついでに、その食べ物（取り入れる表現量）の違いによる、人間の表現を比較してみれば、肉食を主体とした西洋人は、身振り・手振りや顔の表情などの外に現われる「表現量」が多く、菜食を中心としていた昔の日本人は、身振り・手振りもありなく、顔も無表情である、という違いが見えてきます。

つまり、西洋人と日本人のしぐさを比べてみたときに、「取り入れる表現量」と「発現する表現量」との関係が“正比例”になって現れているのではないか、ということです。

もっとも、食べたものはアミノ酸にまで分解された上で、体内に吸収されるのだそうで、そのアミノ酸に「時間の表現量」の記憶が残っているのかどうかは、ド素人の私には分かりませんが。

建築家・ルイス・カーンは言いました。

**自然の中の一切の物質、つまり山・川・空気・そしてわれわれ人間も燃えついた光からできているということです。**

（ルイス・カーン建築論集 鹿島出版会）、と。

「時間のお布施」にこの言葉を“代入”してみれば、私達人間は、多くのものから「光」を頂いて生かされている、という口マンもまた見えてくるかと思います。数多く集まった光は、白になる。

それと同じように私達の個性の表現もまた、白い無垢なる“光”となるような、「本質的」なものをその表現の中に織り込むべきではないかと思います。

たぶんその無垢なる“光”となるものは、「愛」・「美」・「勇



気」といった普遍性を持つものになるのだろうと思います。

そして住まいづくりにおいては、それは「安らぎ」や「静かなる感動」といった、人の心に「歓び」をもたらすことのできるものになるのだろうと思います。

そうした普遍性を持ったものを、言葉やかたち・色彩・音などを通して、私達人間は表現するようにつくられているのではないか、と私には思えます。

言い換えれば、様々な方法で「芸術的な表現」をするように、人はつくられているのではないかと。

それは、無数のもの言わぬ「時間のお布施」の上に生きる、人間に与えられた難しくも楽しい仕事なのかも知れません。

私達が建築を設計し、つくるということ。それもまた「時間のお布施」に報いるための、ひとつの大きな表現方法として、私達に与えられているのではないかと思います。

そのように考えてみれば、住まいを始めとした建築の設計は、単に技術のもとに形を作るのではなく、こうした空想やロマンなどの、形なきものを想うことから始め、そこから人の心に「感動」や「歓び」が湧き上がるような「空間」などを生み出すことが、「思惟する魂」を持つ人間としての、「時間の表現」の本来の有り様であり、また目的とするところではないのか、と私には思えます。

空想・妄想・ロマン・牽強付会 etc... こうした形なきものからの建築設計。おヒマなら一度お試しを。

# 被災建築物危険度判定活動 (10月21日鳥取県地震) 報告

被災建築物（鳥取地震）報告

8

大洲支部 毛利 政友

平成28年10月21日に鳥取県中部で発生した地震について、10月26日から10月29日まで、被災建築物危険度判定活動に参加しましたので、報告します。

今回の派遣について愛媛県内では、愛媛県職員及び私ども内子町を含めた6市町の自治体職員、合計12名が派遣、判定活動は北栄町・三朝町で行いました。



上の写真は倉吉市の様子です。現地入りした最初の印象ですが、倒壊した家屋は特に見られない反面、木造家屋の屋根の被害が数多く見られました。

特に棟瓦のズレが多く発生しており、シートによる養生が目立ちました。



判定活動の一連の流れですが、まずは危険度判定コーディネーターから、調査地域や調査方法（について説明を受けます。その後、全体（愛媛県）で集まりミーティングを行います。このときに班の編制や判定する区域を調整し、各班に分かれて現地調査を行います。

現地調査については2人1組で行うこととされています。判定が終わると全員で集まり、各班の調査結果の集計、地図への被害状況の書込等を行い、資料のとりま

とめを行います。翌日も判定作業がある場合は、危険度判定コーディネーターより指示を受けます。

実際の判定活動ですが、被災された方が住まわれている場合は、お話を聞きながら調査を行いました。やはり不安を感じている方が多く、外観調査で一度は「調査済」とした建物でも、「屋根瓦が落ちてきて通行人に当たつたら心配」との意見を受けて「要注意」のステッカーを貼った物もありました。



老人福祉施設の現場では、外観調査のみならず建物内部や屋上の調査を行いました。

内部天井ボードの落下、空調室外機の固定ボルト破断、コンクリート壁（非耐力壁）のひび割れ、EXP,Jの破損がありましたが、おおむね被害の程度は軽微であったこと、落下物の近くに立ち入らない処置をするなど、注意する点を伝えて納得をいただきました。

今回の判定活動に参加して、建築士として専門的な意見を求められることがありました。ひとたび地震が起これば不安になる方が多くいますので、少しでもその不安を取り除けるよう、知識を養い今後の活動につなげられたらと思います。

最後になりましたが、愛媛県では「被災建築物の応急危険度判定」の講習会を毎年行っています。一人でも多くの方に参加いただけたらと思いますので、よろしくお願いします。

## 第8回講座（12月17日）

場所：愛媛県林業会館

講師：八女町屋再生応援団 代表 北島 力先生

### 「文化遺産を活かすまちづくりのアプローチ」 ～八女福島のまちづくり25年の歩み～

今回は、はるばる福岡県八女市より北島力先生をお迎えして、ご経験に基づいた「八女町屋の再生とまちづくりとその活用方法」についてご講義いただき、先生を中心となって作成されたドキュメント映画「まちや紳士録」を鑑賞しました。

先生は八女市職員で、平成5年から企画課企画係主任としてまちづくりに参画されるようになりました。八女市福島街なみ環境整備事業方針報告書策定、事業計画策定後に町屋等の修理・集計事業を推進されました。その後もずっとまちづくり行政に携わり、平成22年に都市計画課長として景観法に基づく「八女市文化的景観条例」を制定後、景観計画を志向されました。

同24年、市役所を定年退職後は、直面する諸課題の解決に向けてドキュメント映画の製作を進めるため、八女町屋ネットを立ち上げ事務局長に就任されました。現在はNPO法人八女町屋生成応援団代表として、役所時代に培われた経験も基に八女町屋の保存・活用に全力を投じられています。

これまでの豊富な現場での経験を基に、たくさんの有意義な話を聞くことができました。講義の概略は以下の通りです。

#### ＜午前の部＞

##### 八女の歴史と町屋の再生とまちづくり

- 江戸時代の度重なる大火を経験して江戸後期に完成した、いわゆる「居蔵（いぐら）」と呼ばれる重厚な入母屋妻入り大壁土蔵造の町屋が特徴
- 古い道である豊後別路沿いに江戸期から昭和初期に建てられた伝統的な建築が建ち並ぶ。



居蔵造の町屋が並ぶ八女福島の町並

報告：文化財まちづくり委員会委員長 花岡 直樹

- 建築士会八女支部との連携
- まちづくり団体の概要とまちづくりの特徴：住民と行政が連携した組織、民間が主体的に活動している組織を紹介
- 国の補助金制度の活用の方法
- 町並みを活かしたまちづくりの課題への対応



北島先生の講義の様子

#### ＜午後の部＞

##### ドキュメンタリー映画「まちや紳士録」鑑賞

- 高度成長時代、経済の論理、開発の波から多くの町屋が取り壊された。
- 古民家を修理して住む、古材を利用する、家を代々つないでいく。
- 日本の「木の文化」は伝統、暮らし、命、心とともに家（町屋）をつないできた。
- 繁栄の中で忘れかけている日本の伝統文化の本質を問う。

##### 文化財建造物の活用のマネージメント

- 活用：公開による活用（鑑賞、学術的な利用等）と地域振興等への活用（観光・産業振興、まちづくり、教育等）も違いの説明
- 地域の活動促進・活性化、管理体制の確保、資金確保などの相乗効果を説明
- 文化財の効果的な発信・活用について説明
- 成果につながる効果的な発信・活用のヒント集を提示
- 空家対策について：2015年5月に空家対策特別措置法が施行された。
- 情報を共有し、仲間を増やすことが重要である。

# 第8回いまばりのまちをつくろう絵画コンクール 「今治のまんなかにこんな建物があったらいいな!」

10

今治支部 絵画コンクール担当副支部長 曽我部 準

開催日 11月12日(土)・13日(日)

場 所 みなと交流センター「はーばりー」1F

参加者 350名余(来場者)

今治支部では毎年『いまばりのまちをつくろう絵画コンクール』を開催し今回で第8回目を数えます。今年もサブテーマを「今治のまんなかにこんな建物があったらいいな!」とし、7月上旬に市広報と教育委員会を通じて作品を募集したところ、356点の応募をいただきました。

このコンクールは、港の再生事業をきっかけとした市街中心部の活性化に建築士会今治支部でも何かできる事があるのでないかという想いから生まれた事業です。この活動は、平成24年の建築士会連合会全国大会で奨励賞を受賞し、他の地域にも誇れる事業となっています。そのねらいは、今治の未来を担う子供たちに自分たちがあつたらいいなと思う建物の絵を描いてもらうことで、中心市街地の活性化について少しでも興味を持ってもらうこと、そして子供たちが描いた希望を通して大人にも活性化に興味を持ってもらうこと。そしてプロの建築士が子どもたちの絵を模型にすることで、自分が絵に描いたものが現実に出来上がるという建築の楽しさを感じてもらい、建築っていいな、将来建築士になってみたいなどという気持ちをいただいてもらうことが狙いです。

そういう想いで港再生をきっかけに8回を重ねた当絵画コンクールですが、今治みなと交流センター「はーばりー」の完成をひとつの区切りとし、今回を以って終了させていただくことになりました。今治の未来に多少なりともデザインの種をまけたのではないかと考えております。当コンクールは一旦終了しますが、私たち建築士会今治支部は、また新たな仕掛けで中心市街地の活性化はもとより今治地域のためにこれからも貢献したいと考えています。



支部長賞模型



支部長賞インタビュー



記念撮影

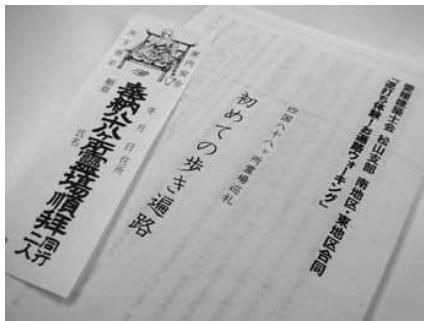
# 「逆打ち体験!お遍路ウォーキング」 のご報告

松山支部 高須賀 範昌



< 46番札所浄瑠璃寺 参加者で記念撮影 >

11月6日（日）「逆打ち体験!お遍路ウォーキング」を実施しました。天候にも恵まれ、秋を感じながら歩いて見ることで知る地元の良さを感じて頂けたのではないかと思います。今回は、48番札所西林寺～46番札所浄瑠璃寺までの約7kmのコースを14名の参加者で通常とは逆のルートを歩きました。



<高須賀さんにご準備頂いた資料>

お寺でのお参り作法やお勤め、道中では遍路墓・石碑（道標）・重信川の橋がないころのお話をしました。

この度、お忙しい中、お遍路ウォーキングにご参加頂きまして、ありがとうございました。今後は、継続事業として、お遍路ウォーキングを開催したいと考えておりますので、今回参加出来なかった方も、次回は是非ご参加頂ければと思います。

案内人（四国八十八ヶ所靈場会公認先達）【高須賀範昌】

## ■ご参加頂いたみなさまからの感想

以前から「体験したい」と思っていましたが、きっかけがなく今回の案内を頂き快諾しました。

当日は天候にも恵まれポカポカ陽気のなか、すれ違うお遍路さんと挨拶を交わしながら、時には白装束に金髪の白人の方もいて、初めてのお遍路巡りで「逆打ち」する身分でないのに恐縮しつつ、「それ違うのは逆打ちだから？」と、変に納得していました。道すじの傍らに

立つ道標に足を止めて、由緒をお聞きし、「この場所に300年前からあるんだ。」と、今では人通りもまばらな道にたたずむ道標と、今日まで大切に伝えてきた人々に思いを巡らせました。「逆打ち遍路は三倍ご利益がある。」と聞きましたが、それに「初体験」と「歩き遍路」のご利益を加えた、五倍増の、「逆打ち体験!お遍路ウォーキング」となりました。最後になりましたが、案内役をして下さった高須賀さんをはじめ、企画・運営をして頂いた南地区・東地区的皆さんにお礼申し上げます。

【道後地区長 相原昌彦】

人生で初めてのお遍路参りが先達さんのご案内の下という大変貴重な機会に恵まれました。また、ウォーキング道中の会話も弾み、皆さんと楽しい時間をすごせました。【南地区 丹生多美】

これまでにお参りしたことのあるお寺もありましたが、車ではなく徒歩でお参りすることで、違う風景を眺めることができました。1200年もの間、お遍路さんたちがどのような思いで88箇所を回ったか、僅かではありますが感じ取ることが出来ました。【南地区 永井由起】

私の先祖代々のお墓が47番札所八坂寺にあり、他のお寺も何度もお参りに行つたことがありましたが、先達の高須賀さんのご案内でお参り出来たことで、新しい発見がいくつもありました。正しいお参りの方法や、お経の唱え方、道中の歴史的背景等、多くの刺激を受けることが出来ました。お遍路ウォーキングを開催するまでに多くの打合せや、資料の準備等、ご協力頂いた高須賀さんに感謝申し上げると共に、今後も南地区的目玉行事として継続していくれば良いなあと地区長として勝手に考えています（笑）。高須賀さん、ご参加頂いたみなさま、ありがとうございました。【南地区 地区長 近藤岳志】



< 47番札所八坂寺 >



<土用部池に2番目に古い  
へんろ道標 貞享2年>

# 女性委員会報告

委員会報告

11

## 瓦の勉強会に参加して

松山支部 川崎 陽子

平成28年11月26日、今治市菊間町のかわら館で行われた、瓦の勉強会に参加しました。女性委員長の大塚さんから、「子ども連れでも大丈夫!」と声をかけていただき、2歳になったばかりの息子を連れての参加でした。当日は、子ども2名を含む6名が集まりました。

立派な鬼瓦が印象的なかわら館の前で愛媛県瓦工事業組合の方と待ち合わせし、土会のメンバーのみでまずは館内の見学です。最上階の4階はギャラリーとなっていて、菊間出身の芸術家の美術工芸品が展示されています。3階には、瓦の木型など瓦に関する様々な資料を展示している資料室、現代の名工に選ばれた日本全国の鬼師達による作品が展示された特設展示室、そしてちょっとした会議が出来るような瓦楽庵という和室がありました。そして最後に2階にはミニチュア模型があり、明治時代の菊間瓦の生産の様子が再現されていました。私はどれも興味深く見ましたが、2歳の息子には何が何だか分からなかったかもしれません。ただ、退屈している様子もなく、楽しそうに走り回っていました。もう少し大きくなったら、また連れて来たいと思っています。

そして次に、別棟の実習室へ移動し、コースター作りです。用意していただいた何種類かの実寸大の型紙から好きな図柄を選び、直径約11cmの丸形の粘土に押し当て、鉛筆で図をなぞり粘土に図を写します。そして図が凸面になるよう、まわりを削っていきます。



予定時間は2時間、皆黙々と作業に打ち込みます。息子がいるのでコースター作りは出来ないかも...と思っていましたが、遊べるように粘土の塊を用意していただき、1時間作業に集中することが出来ました。削った図はいびつで表面もがたがたになってしましましたが、出来上がりが楽しみです。指導していただいた菊銀製瓦の菊地晴香さん（女鬼師としてご存じの方も多いと思います）のコースターを見て、さすがプロだなあと感動しました。

今回、子ども連れの参加で、迷惑をかけてしまうのは少し不安でしたが、皆さんに声を掛けてもらったり相手をしてもらったり、とても有難く息子にとって良い経験になったのではないかと思います。

そして、愛媛県瓦工事業組合と女性委員会との間で日々交流があるから、こうして継続して勉強会が行われ

ているのだと感じました。今後も、交流が続き、勉強会が行われることを願っています。

## 女性委員会新年会の開催報告

松山支部 佐々木 幸子

開催日 平成29年1月15日

場 所 『懐石 おか多』京料理にお肉を取り入れた肉懐石  
参加人数 12名

前々から予定していた日ではありましたが、最強寒波と重なり皆さん無事集まれるかと心配しましたが、今年は寺尾会長も参加して頂き、12名の参加で新年会を開催いたしました。前回同様、遠路車での参加も多いため、せっかくのお酒も召し上がれず、それならばお料理にコストをかけて美味しいものを食べようという趣旨で、お得なランチタイムに開催しています。本来ならこのお店も日曜は定休日なのですが、オーナー様のご厚意で開けて頂きました。お料理は、デザートまで全8品を1品ごとにお料理毎に説明を受けながら供されるスタイルで、本当はワインでも頂きたいな…（私だけ??）と思いつつ、盛り付け方やら器を愛でながら舌鼓をうちました。懐石ではめずらしく色々とお肉を味わいましたが、ボリューム的には上品で少なめでしたので、こういう女性ならではの集まりには胃にも優しくいいのかもしれません。が、舌の肥えたみなさんに喜んで頂けたでしょうか？

今回は、宇和島から田中陽子さん（元、副会長の田中羊子さんと同じヨウコさんなのでお間違いないように）と、愛南町から山田千尋さんのお二人が遠路この最強寒波の中、初めて参加して頂きありがとうございました。早速名刺交換やらライン交換などみなさんと交流を深めて頂けたと思います。やはり、お顔が見えるといいですね！

今回の新年会をきっかけに、また色々な勉強会等にぜひご参加頂けたらいいと思っています。

最後に、おしゃべりに夢中になって集合写真を撮り損ねました。参加者全員が写ってなくてすみません。帰り際、雪のチラつく中お店の前で急遽撮った写真ですが前列右から二人目が田中さん、その左隣りが山田さんです。



では、新年会でお会いできなかつた方も含めて、今年もみなさまにとって良い年となりますように。

# とびだせ建築士 in 南予

大洲支部 毛利 政友

日 時：平成28年12月10日(土)

場 所：西予市衛生センター建設現場

参加者：吉田高校生10名+教員3名

今回のとびだせ建築士in南予は、吉田高校で建築を学ぶ生徒10名、及び引率の教員3名を招いて、西予市の衛生センター建設現場にて現場見学会を行いました。

平成26年から工事がされているこの現場は、平成29年3月の竣工に向けて慌ただしく動いており、まさに追い込みの時期となっていました。



<衛生センター 全景>

現場の説明は、工事を担当しているクボタ環境サービスの田中さんに行っていただきました。

この建物は汚水処理を行う施設であり、また隣に道の駅「どんぶり館」があることから、汚水収集車の動線が道の駅から目立たないよう配慮されていること、また道の駅の駐車場不足を解消するため、連絡橋により駐車場を整備する計画があることなど、性質の違う建物同士の距離感について、苦労をされているようでした。



事務所での概要説明が終わり、現場内部の案内に移り

ます。汚水処理施設であるため、ポンプや配管が複雑に入り交じる無骨な空間を予想していたのですが、現実は違いました。写真では非常にわかりにくいのですが、床や壁、機械の色がカラフルなのです。



<青色やピンクで塗られた設備機器>

田中さん曰く、通常なら後のメンテナンスを考え、標準色である緑色の塗料でほぼ統一するそうです。しかしこの現場では、カラーコーディネーターによる色彩計画のもと、建物内部や機械類の塗装を行っているとのことでした。タンクやポンプは、それぞれの系統に合わせて色彩が決められており、こういった見学会を想定しているような配慮がされていました。



<地元木材が使用された事務エリア>

今回の見学会は鉄筋コンクリート造で、機械設備が多く設置される建物でした。普段立ち入ることが少ない施設でもあり、生徒たちも熱心に見入っていました。木造以外の建物も見ることで、建築の様々な形に興味を持っていただけたらと思います。

最後になりましたが、年末の忙しい時期にもかかわらず見学会を引き受けてくださったクボタ環境サービスの田中さん、また準備のために奔走してくださった建築士会スタッフのみなさん、大変ありがとうございました。

# 平成28年度技術講演会「日本建築の美しさ」報告

講師：花岡 直樹氏

委員会報告

11

青年委員会 委員長 松平 定真

開催日：平成29年1月14日（土曜日）

14:00～16:30

会場：愛媛県林業会館大ホール

参加者：77名

今年度は古建築界で今一番人気の花岡直樹氏に講師をして頂きました。

副題として - その深い軒を支える裏技について - ということで、日本建築において大きく張り出した屋根とそこに載せられた瓦と葺き土の重みをどのように支えているか、また、三重塔や五重塔が地震で倒れない訳を分かりやすく講演して頂きました。

昨年の技術講演会終了後に、僕の中で次回の講師は花岡さんにお願いしようと密かに思っていました。青年委員会で提案したところ満場一致で決まり、昨年秋頃に花岡さんにお願いしたところ快諾いただきました。

何を話したらいいのかと、花岡さんに聞かれたときに、「花岡さんの話したいことでいいです。」というアバウトな返事をしたにも関わらず、素晴らしい題名を考えて頂きました。おかげさまで、興味を持った人が多く集まり、例年の倍以上の参加者になり、会場に入りきらないかと心配するほどでした。



<会場風景>

内容は花岡さんが今まで研究・調査してきた各地の古建築の紹介から始まり、日本人が古くからいろいろ工夫を凝らして建築物の重みを支えた上での美しさなど、いつものシャレを交えながら（今回はいつもより少ないような気がしましたが…）講演をしていただきました。

事前に学生や一般の方も受講することをお伝えしていたので、難しい内容を分かりやすく興味が湧くようにお話しして頂けたのは、さすが花岡さんだなと思いました。

僕も講演を聞いて古建築の美しさの裏側にある数々の先人の苦労やいろいろなアイデアなど、興味を惹かれることが多くあり、次回こそはヘリテージの講習を受け

て、もっと古建築について勉強したいと思いました。参加者のみなさんもそう思われたと思います。

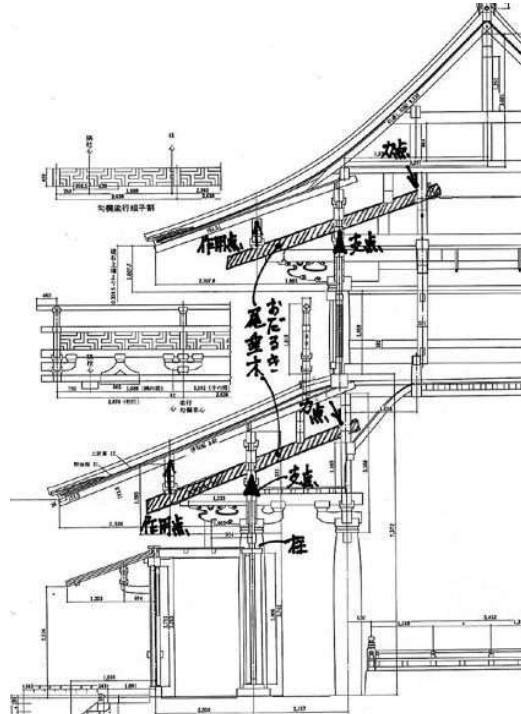
講演会のアンケートを後日確認したところ、今回の講演会の盛況ぶりを改めて痛感し、花岡さんに講師をお願いして良かったなと思いました。

来年度も楽しい講演会を企画したいと思いますので、ぜひご参加ください。

花岡さん、お忙しい中の資料作り、講演をして頂き本当にありがとうございました。



<公演中の花岡氏>



<講演会資料より>

# 「いしづち縁会」の開催報告について

広報委員 渡邊 道彦

1. 日時 平成 29 年 1 月 28 日（土）

17:30 ~ 20:00

2. 場所 松山市二番町なが坂

今年度から「いしづち」の編集委員を務めさせていただいております広報委員 1 年生の渡邊より、先日開催されました、会報誌「いしづち」関係者による意見交換交流会「いしづち縁会」の開催報告をさせていただきます。

「いしづち」に連載を投稿いただいている方々及び、過去に「けんちくの輪」を執筆された方々に、お声掛けさせていただき、12 名の皆さんにお集まりいただき、有意義な交流会が開催出来ました。

広報委員会としての初の試みで、この「縁会」の趣旨としましては、一つには、投稿いただいている皆さんに対して、特に、連載で投稿していただいている執筆者のご苦労に対して、直接お礼を申し上げる機会を持つことができれば、ということと、もう一つは、会報誌としての活用用途が、委員会報告等の情報伝達としての一方通行的なイメージなので、せっかくの記事に対しての、読者からの感想や反響を知りうる意見交換の場や、執筆者と読者との接点があつてもいいのではないかと思い、編集作業の席での私の疑問から、委員長に認めていただき、今回の開催に至りました。

まず、玉乃井委員長より、正式に出席者の皆さんへの謝辞があり、建築士会が公益社団法人に移行する際に、会報誌の内容も外部への発信と、内部の行事報告等を半々にして、現在の様なスタイルになっているとの説明がありました。続いて委員長より、主に外向けの記事を投稿いただいた参加の方々を紹介いただき、引き続き、おひとかたづつ、お言葉をいただきました。

3 年ほど前から、表紙を提供していただいている版画の作者であり、「竹のはなし」も投稿いただいている山田さんには、わざわざ内子町からご参加いただきました。

続いて「いしづち」では、毎号欠かさず投稿していただいております「いしづち」の顔的存在の花岡さんのお話しがあり、今連載中の「故きをたずねて」は、平成 29

年度中に一応完結するように書いている、とのお話がありました。

「くさぐさの風景」の安藤さんからは、せっかく書き溜めていた絵と、投稿文章のつじつまが合わない場合があって、結局、急いで描き足す羽目になる事があるとの裏話を告白していただきました。

「基礎のこと」の田中さんからは、記事の通り熱意が伝わってきました。

連載ではありませんでしたが、施工者の立場で執筆していただきました「業・技」の菊池さん、新多さんからは、機会があれば、また投稿いただけるとのうれしいお話をいただきました。

続いて、「けんちくの輪」で投稿いただきました、河野さん、永井さん、松本一師さん、岸さん、近藤さんには、前振りなしでの指名でしたが、一生懸命に投稿内容を思い出しながらお話しいただきました。

「けんちくの輪」に登場されていない事に誰も気づかず（自虐スピーチありがとうございました）ご案内が遅れてしまった大塚さんは、実に 18 回ものご投稿いただいている投稿職人でした。

次回、もし開催出来る機会がありましたら、皆さんの住む地域にも出張開催いたしたいと思いますので、乞うご期待下さい。よろしくお願いします。



# 「走ってみた」

新居浜支部 鴻上 八大

何を思ったか49歳からマラソンを始めてみた。中学高校と帰宅部だった私が一廻り若い世代の方々と一緒にマラソン参加表明したのである。懇親会の場だったので酔っていたのであろう。ノリで表明したようだ。

しかしながら毎日事務作業なので体は動くのか?

少し走ってみようとスポーツ店でシューズからウェアまで買い揃えくじけないように少し高めのを買った。さあ走ってみようと「走ってみた」。300m付近で足が止まってしまった。ああ情けない。しかし折角買った高いウェアを無駄にしたくないので、3日後にまた走ってみた。今度も途中で足が止まった。ああ350m。でも少し伸びたようだ。こういう積み重ねを1ヶ月続けてみたら今度は足が痛くなり外科医院でレントゲンを撮るはめになった。

結果は原因不明。自分では慣れない事をしたので痛くなつたのであろうと少しの期間休んだ。また再開したが、なかなか上手く走れない。何か走り方があるのだろうかと思い友人に聞いてみるとランニングの本を紹介してくれた。これはありがたい。4、5冊ほど買い込み読破した。

そうするとどうだろう。1km走れるようになり次は2km次は3kmと徐々に距離が伸びていった。ランニングって気持ちいいかもしれない。とこの時から思い始めた。

その上ランニング後のビールがこれまた旨い! 家内も健康の為だと思い込んでいるので調子に乗って毎回ランニング後はビールとなってしまった。

ありがたいものだ。初めての大会が愛媛マラソンのフルマラソンになった。大きな目標もできたので大会前日まで頑張れた。また皆が応援してくれたのもありがたかった。そんなこんなで、いよいよ初マラソンの日がやってきた。色々な方からアドバイスをもらったので後は練習通り出来るかが問題である。

スタートでは、ぼっちゃん列車の汽笛を聞きながら感動の出走だ。10km、20km、おっ順調である。30km付近で大きく膨らんだウエストポーチに詰め込んだ食糧を食べてもうひと頑張り出来た。沿道での応援もありがたい。しかしついに31kmで足が止まった。今迄感じたことのない痛みが出てきたのである。

でも安心である。私のウエストポーチはドラえもん袋なのだ。湿布やエアサロンパス、下痢止め等出てくる。ストレッチをしてまた走り出した。しかし500m毎に歩くことになってしまった。しかも寒い。時間を計算してみると時間内の6時間は危なくなってきたので、走った。歩いたけどただ頭の中を真っ白にして走った。苦しい中、ふと前をみると同じペースで走っている私の好き

なメイドのコスプレ女性がいた。離れないように後をついて少し頑張れたが、頭が下がって下を向いてヘタレそうになった。ん? 下をみると彼女のお尻が目の前に見えた。なかなかの形である。ずっと拝見したいが、後をついていくのがやっとである。ああ、お尻が逃げていくではないか。え~い、こうなつたら変態になってやる。ずっとくっついてやるぞ。やぶれかぶれでずっと彼女の後についていった。苦しさは、彼女のお尻のおかげで紛れた。

いよいよゴール! 結果は、時間内の5時間52分で完走出来てしまった。感謝感動である。

まず母に「丈夫な体に産んでくれてありがとう」と恥ずかしながら報告が出来た。中学高校と帰宅部で仕事も事務職の私が、まあびっくりの完走である。自分でも、やるもんだと同時に、この達成感。仕事のプロジェクトが終わったと同じ位に満足出来た。それから毎年フルマラソンに挑戦しタイムを伸ばしていく。

こういう気持ちにさせたのは、昔やり残した感もあるかもしれない。今ではこの達成感を仕事と一緒に味わいながらメリハリのある毎日を過ごしています。これも家族の理解と周囲の方々、けんちくの輪でバトンを渡してくれた岸さん等の支えがあって今まで頑張れたのだと思います。感謝しますと共に今ここでおそくなりましたがお礼申し上げます。今後の私の人生に繋がっていくと思っております。

このけんちくの輪のバトンを頂いたことで自分がどうして「走ってみた」のかを振り返ることが出来ました。バトンを渡してくださった岸 良一さんに感謝しています。ありがとうございました。

私が次にバトンを渡すのは、建築士会の楽しみ方を教えてくれた新居浜支部の宮崎秀俊さんです。よろしくお願いします。



# トランプと安倍と La Mancha の男

宇和島支部 山本 文義

長い封建時代が終わって明治になり、欧米の進んだ制度を取り入れようとした新政府は、様々な分野の技術者をヨーロッパに送り出した。文明開化の夜明けともいえる時代を迎え、お雇い外国人と呼ばれる異国人を次々と招いた。建築の分野でも、歴史教科書に載るような優秀な建築家を輩出した。柱のない大スパンの梁を架ける知識と技術が導入され始めた。三間くらいの空間しか造れなかつた大工棟梁たちは、彼らに太刀打ちできなかつた。が.....ドイツのロマンチック街道沿いや、イギリス、ヨークにある中世の3～5階建ての建物群を見て、これこそが正統な建築であると思ったに違いない。しかしそこは、震度6強の強烈な揺れなど何千年もない安定地盤。木造建築は斜材を使い、トラスやアーチで作るものと考えた錯誤。このエリートを自認する西洋かぶれの青二才達は、日本の伝統工法を理解する前の洋行によって物事の真理を見抜くには、ただ幼すぎたのであろう。

この頃を境に、日本の伝統工法の受難が始まった。明治時代我が国は、大工棟梁たちが闊歩する職人天国だった。貫と単純梁のオンパレードの世界であり、大建築は彼ら、住宅は大工、とすみわけができ始めた。

ところが、どの国もどの時代も、学識と権限を持つ者が上に立って指図するようになり、少しずつ職人の領分を侵し始め、大も小も管理し始める。やがて、伝統建築にとって最大の不幸が訪れることになる。20世紀に入り、ラーメン構造理論が建築に導入され、木造は仕口も通し貫も十把一からげにピンとみなすことによって、理論上自立できない構造となり、筋交いの導入が必須となつた。それから100年、アーティストと工芸家を兼ねた職人たちは、現在、労働力以上のものを求められなくなつた。

(これから先を書き進める便宜上、学識経験者や管理する側を「官」、伝統工法を「伝」と記す。) 住宅に使用する松、杉、檜、櫻、桜等の樹種を、目をつむって触っても、舐めても匂っても言い当てることができるほど、木と濃厚な接触を日々繰り返している大工は、「官」と、得意でない議論をしてもかみ合わない。柱に通した貫に母材が破断するまで力を加えても、回転するとは思えない。そしてその形態は、ラーメン構造と似た変形をすると私は考える。自重がコンクリートや鉄に比べて軽い木材には、木独自の構造計算の概念を考慮すべきと思う。しかし、できないのだろう。大工の経験と勘に任せたらいいものを。

では筋交い。その角度と部材の大きさによって（特に隅角部）突き上げ、押し出し、一定以上の揺れに対して

は、自壊が始まる。しかし、「伝」工法では、外に押し出す力が働かない。人間は、200キロのバーベルを差し上げる者もいれば、50キロを支えられない者もいる。木も同じように同樹種でもその応力に差がある。弱い木を数分の一にして許容応力度を決めていたため、大スパンでは無粋ないかめしさとなる。

九州小国町を見るがよい。高度成長期に鳴り物入りで有名建築家が設計した建物群は、部材の応力を過少評価したため、異様な巨大さである。そのため、スパンが長くなるほど不細工になっていく。あのスパンをあの工法で架けた設計者の美意識を疑う。現代のように荒壁を塗らない工法になると貫は、120×30くらいの寸法で横架材間に4本程入れる。意匠のために、窓の高さをランダムに変えず一定にすると内法貫が、家の端まで通る。地貫きは、玄関、勝手口、掃き出し窓以外は通す。貫の高さをxy軸で貫半分くらい高さを変えると隅で柱に差し込む貫のせいが3/4残る。開口で止まる貫き穴は柱3/4ほど入れる。楔厚は一寸以上のものを一本で打ち込む。楔型はダメ。すると四寸の貫は、五寸の強さに近づく。楔の端部は、柱より一寸以上出しておく。

熟練労働者の不足をよく耳にした。十分足りていた時代からそれは叫ばれていた。これは、官が意図的に流していたものと思う。「未熟な職人でも同じような仕上がりになるように我々が考える工法を広める。」木造建築に関する限り、未熟なのは官たちの方だった。誇りをもって仕事をしている職人には、ゆるぎない信念がある。未熟な職人でもできる工法となると、子供に後を継がせるのもためらう。徐々に今に至り、熟練職人はほんとにいなくなつた。国の機関が、在来工法と伝統工法を比較目的で実物模型を作つて振動させたところ、金具でガチガチに固めた新しい建築基準の方が早く倒壊してしまい、担当者が総入れ替えになつた始末も聞いた。官もうすうす、この工法の限界に気づいているはずである。気づかないとしたらただの無能。気づいてもなお持論に固執するのは、トランプ並み。安倍総理の、大国にへつらわざるを得ない無念を共に思う。大イコール偉大ではない。考える時間は100年以上あった。官がいらんことを考えなければ、今頃は震度7でも倒れない家ができていたものを。

中世の英國13世紀頃、ある領主が処女税なるおふれを領民に強いた。花嫁は初夜を領主の閨房で過ごせと。領主曰く、領国がますます栄えるため、健康な肉体と骨格を持ち丈夫な子を産む母体かどうかを、慈父心で吟味すると。権限を持ちすぎると、個人も団体もこうなる。

# 平成29年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について

## 平成29年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について 〔建築士会は、まちづくり活動を支援します。〕

公益社団法人愛媛県建築士会は、会員の皆さんと地域の人々と共に進行する社会貢献事業や建築士会の内部組織（研究会等）が実施する地域貢献活動としての事業を応援します。

すでに活動をしている方も、これから何か始めようという方も、一定の条件を満たせば事業に助成金を活用することができます。

### 1. 助成の対象事業の内容

会員が参画する以下のテーマに沿った営利を目的としない地域貢献活動が対象です。

- |                |                 |                      |
|----------------|-----------------|----------------------|
| (1) 地域のまちづくり   | (2) 景観の保全       | (3) 居住環境の保全・整備       |
| (4) 自然環境の保全・整備 | (5) 福祉環境の整備     | (6) 地域住宅づくり          |
| (7) 地域防災づくり    | (8) 歴史的遺産の再生と活用 | (9) その他、地域活性化、社会サービス |

### 2. 助成の対象

- ・建築士会会員が参画する地域貢献活動に対する活動助成
- ・国、地方公共団体から、建築士会に対しての委託事業、人材派遣に関連して進められる地域貢献活動に対する活動助成
- ・地域貢献団体助成事業運営委員会が助成を必要と認めた地域貢献活動に対する活動助成

### 3. 助成金

- ・1件当たり限度額50万円とし、助成率は事業活動費の3分の2とします。  
(継続的事業の場合は3年を限度とします。)

### 4. 応募手続き

- ①助成申請者は
  - ・申請時に組織内に建築士会会員として継続して在籍が3年以上の者が複数参画している活動団体の代表者
  - ・建築士会の内部組織（研究会等）の代表者で上記2の助成事業を行おうとする者。
- ②助成申請書は規定の申請書により申請してください。（申請書はHPからダウンロードできます。）  
<http://www.ehime-shikai.com/other/6734.html>

### 5. 応募期間

平成29年4月3日～5月31日まで（事前問い合わせは随時受け付けます。）

※応募期間前であっても、仮受付をしますので、お申し出ください。

### 6. 助成対象事業の決定と助成金交付等について

- ・助成対象事業の趣旨に沿った事業かどうかを基準に「愛媛県建築士会地域貢献団体助成事業運営委員会」が審査します。助成額の決定は、申請書受理後60日以内に書面にて通知します。
- ・事業の実施期間は、助成額決定日から平成30年3月31日の間に実施される活動を基本とします。
- ・助成金は、交付申請者に対して、助成金交付決定通知後の助成金請求に基づき交付します。
- ・交付申請者には、活動の内容・助成金の管理・報告書の提出に責任を持っています。

### 7. 助成事業一覧について（事例）

年 度	事 業 名		助 成 額	備 考
26 年度	八幡浜市	技手木村保一顕彰事業	20 万円	継続 1 年目
27 年度	八幡浜市	技手木村保一顕彰事業	10 万円	継続 2 年目
	今治市	特定非営利活動法人今治シビックプライドセンター	11 万円	単年度
28 年度	八幡浜市	技手木村保一顕彰事業	20 万円	継続 3 年目



地域づくり人養成講座  
(木村保一顕彰会)



フィールドワーク  
(今治シビック  
プライドセンター)

#### 提出及び問合せ先

公益社団法人愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町4丁目1-5  
TEL 089-945-6100 FAX 089-948-0061  
E-mail lee04603@nifty.ne.jp

## あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、広く異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしていきます。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。  
(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承下さい。)

「いしづち」の本年度の原稿締切日

平成29年 5月号 (116号) 平成29年3月23日(木)

※ 校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。

※ 1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり3枚程度まで題名を付けて添付してください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付してください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかも知れませんので、予めご了承下さい。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にまで、建築についての対話等の輪が広がれば、と願っています。

情報・広報委員会

## 読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などを寄せ下さい。お待ちしています。

「いしづち」編集委員会(士会事務局内)宛  
—FAX 948-0061—

## 編集後記

願わくは 花の下にて 春死なん その如月の 望月のころ

と詠んだ西行は、この歌の通りの、その季節に亡くなつたのだそうです。

仏には 桜の花を たてまつれ 我が後の世を 人とぶらはば(西行)

本当に西行は、花を愛して愛した人だったのでしょう。

と、妙に桜の花にこだわってみたのは何のことではない、これは単に私の花見への願望が出ただけのことかも知れません。

表紙の色にもその願望をチラリと。(桜色ではありませんが。)

(玉乃井 公和)

## 〈いしづち〉2017/3

平成29年3月発行

発行人 会長 寺尾 保仁

発行所 公益社団法人 愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5

TEL (089) 945-6100 FAX (089) 948-0061

<http://www.ehime-shikai.com> E-mail:info@ehime-shikai.com

印刷所 明星印刷工業株式会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長 玉乃井公和 副委員長 大上 恵子

編集委員 越智 麻衣 渡邊 道彦 山本 晶子 大平 将司